

尾瀬における関東森林管理局の取組

計画保全部

計画課

尾瀬の国有林について

福島県、栃木県、群馬県及び新潟県の県境に位置する尾瀬国立公園三万七千二百haのうち約55%を関東森林管理局が管轄する国有林が占めています。

このうち、尾瀬地域の北側を、奥会津森林生態系保護地域と利根川源流部・燧ヶ岳周辺森林生態系保護地域に指定し、自然維持を重視した管理を行っています。



尾瀬の風景 (燧ヶ岳)

関東森林管理局の取組

尾瀬国立公園は、本州最大の山地湿原である尾瀬ヶ原と火山堰止湖の尾瀬沼のほか、二千m級の山々を有しています。

壮大な湿原景観、ミズバショウやニッコウキスゲなどの湿原植生、オゼソウやハクサンコザクラなどの高山植物が見られ、自然探勝や登山を中心に春から秋にかけて年間約30万人の利用者が訪れています。

そのような中、平成20年頃からニホンジカによる食害によりニッコウキスゲの開花数が大きく減少しました。



木道上のグレーチング設置

地元重要な観光資源であるニッコウキスゲの保全は喫緊の課題となり、



防鹿ネットによる水際対策

林管理局では、平成26年度から、積雪の少ない6月から10月頃にかけて湿原の外周

に金属製の防鹿柵を設置するとともに、観光で訪れる方が利用する木道上へのグレーチングの設置、さらに沼からの湿原へのシカの侵入を防ぐため、景観を損ねない範囲での防鹿ネットの設置に取り組んでいます。

平成29年には、一般ボランティアの方など地元有志の皆さんを含む約40名の参加を得て防鹿柵の設置を行い、本年10月には、企業等ボランティアの皆さんを含む約80名の参加を得ることができました。

尾瀬国立公園協議会への参画

尾瀬地域は、昭和9年に日光国立公園の一部として国立公園に指定され、平成19年、会津駒ヶ岳と帝釈山の周辺地域を追加し、単独の国立公園として新たに指定されました。

また、尾瀬が単独で国立公園として指定される前年の平成18年に、尾瀬に関わる地元関係者、学識経験者、自然保護関係者、関東森林管理局を



尾瀬サミットの様子

含む行政機関等からなる「尾瀬の保護と利用のあり方検討会（現在の尾瀬国立公園協議会）」において、「今後の尾瀬の基本方針や取り組むべき諸対策が「尾瀬ビジョン」として取りまとめられ、それから10年が経過した平成28年には、尾瀬ビジョンのレビューを行うとともに、「尾瀬国立公園協議会」においてビジョン改定の検討が開始され、今後10年、そしてさらに先の将来を見据えた尾



尾瀬サミット集合写真（最前列左から6番目より、笹川環境大臣事務官、新潟県 花角知事、群馬県 大澤知事、福島県 内堀知事）

瀬のあり方の指針となる「新・尾瀬ビジョン」が平成30年に取りまとめられました。

「新・尾瀬ビジョン」では、気候変動による自然生態系への影響や二ホンジカの生息数の急速な増加、外国人旅行者の増加等、尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境の変化等を踏まえ、尾瀬の今後の方向性・必要な取組等がまとめられています。

尾瀬サミット2018

尾瀬サミットは、平成7年以降、尾瀬保護財団理事長である群馬県知事、同副理事長の福島県知事及び新潟県知事をはじめ、尾瀬の関係者が一堂に会し、尾瀬の自然保護や適正利用等に係る施策を一層推進するため、毎年開催されており、本年は9月10日（月）～11日（火）の2日間、福島県檜枝岐村の尾瀬沼湖畔にある尾瀬沼ヒュッテにおいて開催されました。



防鹿柵設置の様子

当日は、三県の知事をはじめ、関係各市町村長、学識経験者等のほか、笹川環境大臣事務官、林野庁からは関東森林管理局長が出席し、「滞在型・周遊型の促進」や「二ホンジカ対策」など、尾瀬をとりまく諸情勢について活発な意見交換が実施されました。

尾瀬の美しい自然の次代への継承

関東森林管理局では、前述のとおり尾瀬地域の北側を、奥会津森林生態系保護地域等に指定するとともに、尾瀬国立公園協議会をはじめとした各種検討会へも積極的に参画しています。

また、二ホンジカ対策については、一般ボランティアの方々との協力による防鹿柵の設置等により、現在ではシカの目撃数は減少し、ニッコウキスゲも回復傾向にあります。

関東森林管理局としては、尾瀬の美しい自然を次代にしっかりと引き継ぐべく、引き続き関係機関と連携した取組を進めてまいります。

今月の表紙 赤崩

（静岡県静岡市）

大井川の三大崩の一つで、静岡市葵区田代地内の畑畑第一ダム湛水敷の上流部の大井川左岸に位置する崩壊地で、面積は約45ha、幅は最大で約80m、平均傾斜は約35度、大井川との比高で約80m、地質は、四万十類帯の寸又層群の砂岩頁岩互層及び頁岩とされています。

静岡市の「オクシズ百選」のうちの「南アルプスジオサイト」として登録されています。

崩落活動が激しく、崩壊地と扇状地の間が狭隘な谷間となっており、立ち入ることが危険な箇所となっています。写真は、赤崩全体①、源頭部から下流②、中腹から源頭部③の写真です。



①

③

②